

# 図書館forum

実はいろいろ使えます！

～知ってお得な図書館活用術～…………… 寺尾 健夫 1

医学図書館はどこへ行くのか？…………… 石崎 武志 3

■福井大学附属図書館所蔵「小島家文書」を読む(1)

災害・飢饉の世に生きる人びと

一元禄10(1697)年、村人たちの訴状から… 長谷川裕子 5

■福井大学附属図書館所蔵の古典籍(8)

釈祐可『越前名所しるべ草』…………… 膽吹 覚 7

京都書店めぐり報告…………… 菊池 彦光 9

■私の推薦書

「クラシクス」(古典)を読むということ… 宮崎 光二 11

総合図書館ブックハンティング…………… 13

図書館の新サービスの紹介／主な行事等…………… 15

医学図書館歳時記…………… 17

附属図書館展示企画2013…………… 18

# 実はいろいろ使えます! ~知ってお得な図書館活用術~

附属図書館長 寺尾 健夫

てらお・たけお

図書館? 「本がある」「試験の時に勉強するけど…。他に何かあるの?」

学生の皆さんはラウンジ(1階)や学習・閲覧室(2、3階)を一度は利用したことがあるでしょう。しかしこれらは図書館のスペース全体のわずか1/4に過ぎません。皆さんが一度も足を踏み入れたことのない場所が、実はたくさんあるのです。今回は、皆さんの学生生活に特に役立つような図書館の利用方法を厳選してお伝えしましょう。図書館が皆さんに何ができるのか、全体像を紹介します。

## 〈1〉履修登録・レポートの書き方、

就活・進学などについて相談したい場合

→ラーニングアドバイザー(LA)



皆さんの日々の学習・試験勉強の方法や就活・進学などについて、大学院生が気軽に相談に乗ってくれ、アドバイスがもらえます。先生には聞きにくいことでも、同年代の先輩なら本音で話せることがあると思います。ラーニングアドバイザーは2011年にできた制度ですが、学生の皆さんにあまり知られていないのか、残念

ながら利用が少ないのが現状です。一人では難しいことでも、一緒に考えてくれる人がいれば乗り切ることもできます。ぜひ活用してください。ラーニングアドバイザーのスケジュールは図書館ラウンジ前にあり、利用についての質問や予約は、カウンターや以下のアドレスでもできます。

la-reserve@ml.cii.u-fukui.ac.jp

## 〈2〉レポートや卒論・修論を書くため、

就活のための資料や情報、本が必要な場合

→図書館のホームページ



- ①【蔵書検索 OPAC】本のタイトル、著者名等から館内の図書・雑誌を簡単に探せます。(携帯電話からも)
- ②【電子ジャーナル】図書館にあるパソコンからネットワークを介して、雑誌論文を直接読めます。(6000タイトル)
- ③【データベース CiNii, Webcat】求める主題から目的の論文などを探せます。
- ④電子ブックも読めます。
- ⑤HP内「My Library」: 登録すれば次のこと

がカンタンにできます。

◆今借りている本の確認 ◆借りている本の貸出延長 ◆貸出中の本の予約 ◆医学図書館の本の取り寄せ ◆購入希望図書のリクエスト ◆学外への文献複写依頼や図書貸借依頼

## →ジャパンナレッジ(辞書・事典、企業情報)

企業情報満載の会社四季報、週刊エコノミスト、そして各種外国語辞書・国語辞典、現代用語の基礎知識などが利用できます。



★【New!】2014年3月から始めました。

## →日経BP 記事検索サービス

日経ビジネス、日経コンピュータ、日経パソコンなど、あらゆる分野の日経雑誌を読むことができます。2014年4月からサービスを開始します。詳しくはカウンターまで!

## →カウンター

カウンターには、図書館の専門員である司書が常駐しているので、資料や情報・本の紹介・検索方法を親切に教えてくれます。貸し出し以外にも、他大学・県内図書館から資料の複写物や現物などを取り寄せることができます。また、館内の本や雑誌のコピーもできます。

★【カウンターは情報の窓口!】

利用者の皆さんへのお知らせや利用案内、蔵書や各種データベースの検索、電子ジャーナルの閲覧、有用なWebページへのリンク等、何でも聞いて下さい。

## 〈3〉グループで話しながら学習したい場合

→グループ学習室

図書館一階にあり、5～6人で学習できる部屋が3室。一回2時間利用できます。持ち運びできる【ホワイトボード】や【ノートパソコン】も借りることが可能です。申し込みはカウンターまで。

## 〈4〉書庫探検をしてみませんか



図書館のスペースの半分以上は書庫です。書庫の中を探検してみませんか。珍品、お宝本から郷土福井の歴史的な資料まで、一度は見てみたい貴重な本があります。書庫には膨大な本が分類されて見やすく納められています。書庫を巡ると「知」の全体像が見えてきます。ぜひ探検してみてください。

## 〈5〉気軽に過ごせる居場所としてぜひ



最後に、図書館は休業期間以外は【土日・祝日も開館】しています。上手に利用して、日々の生活を豊かにして下さい。

(教育地域科学部社会系教育講座 教授)

# 医学図書館はどこへ行くのか？

医学図書館長 石 崎 武 志

いしざき・たけし

医学図書館とは総合図書館が医学図書を優先的にそろえた状態であると言明すれば、ほぼ的を射ているであろう。しかし、中世西洋医学から解き放たれた医学は個別化（分析）技術を駆使して細胞まで到達し、今は、さらにミクロの遺伝子操作まで操れる細分化の方向をひた走っている。まさに「分け入っても分け入っても青い山」であるが、これを支えるには時間を争う最新情報の取得が必須である。顕微鏡時代からコンピューター時代に突入してしまっている。月単位年単位で更新される活字体の書籍は学生教育に必要なセントラルドグマ（古典）を示すものがあれば良く、それよりは最新情報満載の電子ジャーナル、データベースが求められる。まさに、専門職能集団を育む最新情報を提供し続けるのが第1義である。

それでは、医学図書館は最新医学情報配信の大型コンピューターなのだろうか？

そんな大型コンピューターの拡充整備にはとんでもなく経費がかかる。近年のアベノミクスによる円安、毎年高騰する電子ジャーナル・データベース代、さらに、旧国立大拠点重点化政策による競争的予算配分への転化などなど予算拡大をとんでもなくできない大波にさらされつつある。どう対応すべきか？読者諸兄の知恵をお借りしたい。

ところで、医学・医療の原点は、「時に癒し、しばしば救い、つねに慰む」（Guerir）と先人がおっしゃる。誰もが納得する。そして、最新教育を受けた医師・看護師は「最新の医学・看

護学・医療情報に基づく的確な医療看護技術を適切に患者さんに実施して、病気の治癒・軽減をもたらし、日常生活をできるだけ健康に過ごせるよう工夫する職業」と定義できよう。

人を対象とする医学・看護学・医療技術の知性の継承には、それを裏打ちする理性、感性、品性の発現があってこそ重層化し活き活きとしたものとなる。Guerir のいう「救い」に集中しすぎると「癒しとつねに慰む」がおろそかになり、患者を診ないで病気を診ているという批判を受けねばならない。残念ながら、あふれ出る医学情報を消化吸収して医師・看護師国家試験をパスするのが最初の最大関門のひとつである医学部学生には、とても、余裕がないのがほとんどである。明治初年に来日し我が国の医学教育に精力を注いだベルツ博士が語ったという「科学は有機体であり、それが育ち、反映するには一定の環境が必要である、西洋では何千年もかけてこの有機体が培われてきた。（この30年間に西洋から来た教師たちは）科学の樹を育てる人たるべきであり、またそうなると思っていたのに、かれらは科学の果実を切り売りする人として扱われた。日本人は科学の成果を引き継ぐだけで満足し、その成果を生み出した精神を学ぼうとしない」（梶田昭紹介）という言葉は今日も当てはまる。ベルツ以前の江戸末期に、オランダ医学の習得に血のにじむ努力をしていた先人たちを知る明治の先人達もこのことは充分理解していたであろう。ベルツの方法をとれば、一歩でも早く追いつきたい西洋医学の

習得に気が遠くなるくらいの時間を費やせねばならないことを。幸いにも、先人の努力で、何とか伍していける時代にはなってきた。

かかる、現況でこそ、我が国の着実に健全な医学・看護学・医療の発展のためには、西洋と東洋の医学の歩んできた道を振り返ることが肝要であろう。医学図書館はこういった知性・理性・感性・品性を育むための環境を提供する場でもあるべきだ。殊に、近年では多職種を含むチーム医療も求められているので、face to face な関係を「情報工房」や「語学センター」を活用して築き上げることも肝要であり、その中でも上述の性を磨く機会にもなり得る。医学部学生教育の中で日の当たりにくい医哲学や医歴史などの古典的書物の重要性が低下することは決してない。そして、医師・看護師の卒後教育の場としても医の哲学・歴史、我が国へオランダ医学導入に苦心した幕末の蘭方医の精神などを図書館が積極的にインターネット配信する工夫など種々の試みを行い、医学図書館が漂流しないよう航海しなければならない。

\*以下の書物を参考としました。

①身体の歴史 全3巻 A. コルバン、JJ. クルティース、G. ヴィガレロ監修。小倉孝誠他監訳 藤原書



店 ②病の皇帝「がん」に挑む 上・下 シッダルト・ムカジー著、田中文訳 早川書房、③病気の日本近代史 秦郁彦著 文芸春秋 ④医の未来 矢崎義雄編 岩波新書 ⑤疾病と世界史 上・下 WH. マクニール著 佐々木昭夫訳 中公文庫 ⑥病が語る日本史 酒井シヅ著 講談社学術文庫 ⑦偉人たちの死亡診断書 中原英臣・佐川俊著 小学館文庫 ⑧医学の歴史 梶田昭著 講談社学術文庫 ⑨結核の歴史 青木正和著 講談社 ⑩日本医家伝 吉村昭著 講談社文庫

（医学部看護学科健康科学 教授）



## 福井大学附属図書館所蔵「小島家文書」を読む（1）

## 災害・飢饉の世に生きる人びと―元禄10(1697)年、村人たちの訴状から―

教育地域科学部社会系教育講座准教授

長谷川 裕 子

はせがわ・やすこ

現在、福井大学附属図書館に所蔵されている「小島家文書」は、坂井郡野中村（現坂井市三国町）の小島家に伝来した膨大な文書群である。同文書群は、1972年以来、小島武郎氏からの数度にわたる寄託を経て、2012年2月、小島章宏氏のご厚意により同館に寄贈された。文書を伝えた小島家は、江戸時代を通じて野中村に居住し村役人を歴任すると同時に、周辺村々からの年貢・諸役のとりまとめ等を任とする大庄屋を勤めていた（なお、小島家が大庄屋として管轄していた村々は、居住村の名称をとって「野中組」と呼ばれる）。したがって、「小島家文書」をみれば、一村落の村人の生活状況はもちろん、野中村の周辺に広がる越前平野の村々の動向までもを克明に知ることができる。「小島家文書」のなかには、現代社会に生きる私たちの日常や価値観、合理性からは予想もつかない「ものの考え方」や生活環境、しかしそれでいてどこか現代の私たちにも通じるような教訓や慣習などが数多く眠っているのである。この「小島家文書」を読むシリーズでは、江戸時代の越前に生きた人びとの声・姿を、できる限り鮮明に、そして具体的に掘り出していきたい。

そこで今回は、元禄10（1697）年に坂井郡の36ヶ村が結束して提出した訴状（「小島家文書」2233号文書。以下、「小島家文書」については目録番号を示す。翻刻は『福井県史資料編4中・近世二』168頁を参照）を中心に、当時の村人たちの訴えを聞いてみよう。

この訴状は、8月に「越前国坂北・坂南郡三拾六ヶ村惣百姓等」が「御代官様」に提出したものである。訴状の後段には、「三拾六ヶ村の百姓連判」によって訴訟したかったが、「大勢連判の義、兼ねて御法度」であるため、「組頭」が36か村の百姓等を代表して訴状を提出したと記されている。ここでの「組頭」とは大庄屋を指しているが、末尾に野中村・大

牧村（現坂井市春江町）・米納津村（現坂井市三国町）の組頭が連署していることから、36か村とは小島家が大庄屋を勤めた野中組および隣接する大牧組・米納津組の村々であったことがわかる。

一方、訴状の宛先である「御代官様」は、幕府領代官として西鯖江陣屋を任されていた古郡文右衛門である。訴えを起こした村々は、もとは將軍家の御一門であった越前松平家を藩主とする福井藩領であった。しかし貞享3（1686）年閏3月、6代藩主綱昌の改易によって、47万5千石余あった福井藩領は25万石に半減され、これらの村々を含む22万5千石は幕府領に組み入れられたのである（この出来事を「貞享半知」と呼んでいる）。そのため、元禄期には西鯖江と石田（いずれも現鯖江市）、および舟寄（現坂井市丸岡町）に幕府の代官所（陣屋）が置かれたが、各代官はこれらの陣屋に常駐していたのではなく、現地には手代などを駐在させて自身は江戸に在住し、秋の収穫時にのみ出来高の確認のために下国するのが習いであった。隣接する舟寄陣屋の代官宍倉与兵衛管轄の村々が、同内容の訴訟をするために江戸に下ったとき、36か村の村人たちも訴訟をしようと考えたが、「いまだ御初入り遊ばされざるところ、はばかり多く存じたてまつり延引」したと述べており、また訴状の日付も8月であることから、今回の訴訟は、おそらく代官古郡の国入りに合わせたものであろう。なお、現在「小島家文書」に伝来している訴状は、国入りした代官に提出した原本の草案・控えであったと考えられる。

では、何を訴えたのか。結論からいえば、「高百石に五石宛の夫米御赦免」要求である。「夫米」とは、領主への労働力提供を米で代替するもので、江戸時代の百姓が勤める諸役の一つであった。訴状によれば、「夫米の儀根元は越前守様御知行の節、七拾年ばかり以前、御城御普請ござそうろう刻、人足郡役

に仰せ付けられ」たとある。70年ほど前の「御城御普請」とは、寛永5（1628）年、3代藩主忠昌が江戸城石垣造営役に任命されたことを指している。忠昌はこの任務を果たすために、福井藩領の村々に対して人足役（夫役）を賦課したのである。しかもそれは、日損・水損や土壌の良し悪しにかかわらず、一律に村高（村の年貢賦課基準高）100石につき5石という率に定められたという。

しかし36か村の村人たちは、やみくもにただ夫米の免除を要求した訳ではなかった。というのも、夫米は福井藩領時代から納めてきたので、幕府領になって以後も上納することについては「少しも御非義」とは思っていない、ただ凶作で収穫が上がらないときにも同額を納入する負担を軽減したいので、凶作の際には減免される「御取ヶ」（年貢）の内に夫米を含めてほしいと述べているのである。では、このような訴えを行わざるをえなかった彼らの生活環境とはどのようなものだったのか。彼らの言い分を聞いてみると、どうやら夫米御赦免要求の背景には「百姓困窮」という現状があったようである。実際に、「飢えに及」ぶ者が大勢おり、元禄10年から翌年にかけて「夫食」（食糧）金の拝借要求が多く出されている（2009・2117・2118・2303・2350など）。その要因の一つには「悪作」（凶作）があり、特に幕府領になった初年の貞享3年は「大悪作」であったという。しかも、坂井郡は「東南に大山を抱え（中略）洪水の時分は申し上げるに及ばず、少しの雨風、又は雪水共に越前・美濃・加賀三ヶ国の山水里水共に」低地の田畑に流れ込んで「肥土押し流」すため、地面が「悪所」な上に、用水の取り入れ口である「鳴鹿・河合春近井堰」からも遠いため、旱魃の年の渇水にも難儀するという。こうした地理的状況や自然環境が人びとを苦しめていたのである。

だが、困窮の要因は天災だけではなかった。坂井

郡で生産された米は「越前国中の下米」で、「福居・三国等にても同国他郡の米よりは各別下直」であった。当時この地域の村の年貢は、半分金納、半分米納だったようだが、収穫した米が町相場で高く売れないため、金で上納していた年貢や大坂への廻米分は借金でまかなっていたという。また、米納の内から廻米すべき米も、生産した米ではなく買米で調達していた。それは毎年の年貢未済分を上納する際、秋に収穫する作物がまだ育つ前に「賤値段にあい定め、まず金子借り、青稲の分出来次第にあい渡し申す約束」を取り交わしていたためである。つまり収穫した稲はまず借金の返済に回されてしまい、廻米を調達する際には、また「青麦」を担保に借金するという悪循環に陥っていたのである。そもそも、「田畑出生の物、御年貢皆済らざる以前にまず売」ってはならない、という幕府の命令はあったが、実際には人びとの暮らしはあちこちからの借金によらないと成り立たないのである。元禄という、江戸時代のなかでも華やかなイメージのある世の中で、人びとの暮らしはなかなか厳しいものであった。

しかし村人たちの訴えは、「潰百姓多く大困窮」という状況にあって、領主・代官に「御慈悲」を求めただけである。つまり彼らの願いは、領主支配からの脱却、というものではなく、いわば「領主の責務を果たし、百姓の勤めを全うできるように」求めたものであった。「百姓困窮」を救済し、百姓が「成り立つ」ように環境を整えるのが領主の役目であるという認識が、災害・飢饉の世の中に広く定着していたことがうかがえよう。訴状の末尾に付けられた付箋に「御見込み遊ばさせられ御指し引き」と記されているように、この訴訟を通じて村人たちは何らかの免除を引き出すことに成功したようである。このような双方の交渉を通じて、領主も百姓も生き延びる方法を模索していた時代であったといえよう。



元禄10（1697）年越前国坂北坂南郡三拾六ヶ村困窮之次第奉願意趣乍恐以書付申上候御事（No.2233）

## 福井大学附属図書館所蔵の古典籍(8)

## 釈祐可『越前名所しるべ草』

国際交流センター准教授 膳 吹 覚

いぶき・さとる

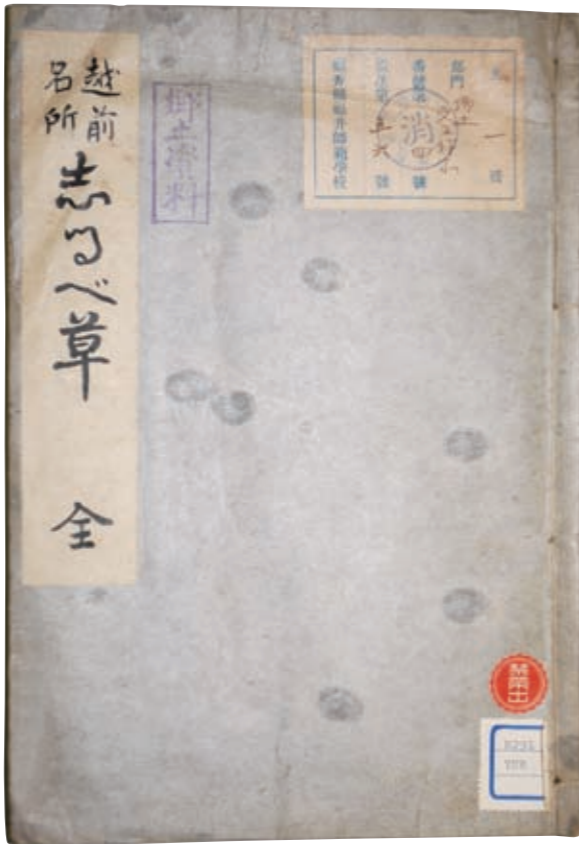
『越前名所しるべ草』は、越前国の名所について古歌を挙げて考証したものである。著者は釈祐可。祐可は浄土真宗本願寺派千福寺（福井市松本）の住職を勤めた人である。

本学総合図書館郷土資料室所蔵の『越前名所しるべ草』は1冊本の写本である。請求記号はH291／YUK。大本（縦27cm×横18.7cm）。灰色表紙。三桎紙。表紙左肩部題簽に「越前／名所 しるべ草全」と墨書。扉中央部に「越前／名所 しるべ草」。序題は「越前名所導者草」。内題は「越前／名所しるへ草」。尾題も「越前名所しるへ草」。全118丁。半丁12行。丁数は書かれていない。印記は「福井県師範学校図書印」とあり、本書が本学教育地域科学部の前身、福井県師範学校の旧蔵本であることが知られる。その本文の書体は首尾一貫して謹直なる楷書体であり、一人による書写と推定される。

序文は妻木直撰述による漢文の序と祐可による和文の序の2編を置く。この2編の中、祐可の和文の序は、本書の執筆の目的を知る便りともなるので、以下にその全文を翻刻して記す。

越前名所導者草

須賀のねのなめわひぬる窓のもとに、むかし見しこゝの花かしこの月の、今さら思ひ出らるゝを、遠きわたりまではなくとも、我すむ国の名所に遊ぶ思ひにて歌よまはやと、人をもそゝなかし侍るつゐてに、むかし国津人の書置る文ともしりて、見侍るに、名所をも名所ならぬをも布留の神杉すきし世に人の物せらるゝ和歌、あるはからうたなど残れる所々をしるし置ける、其中にもた



(郷土資料室所蔵本)

かふことこそおほからめ、今いさゝか愚かなるか  
うかへを添て、をのれにひとしきうひまなひの道  
にわけ入るよすかともならはやと、千々のことは  
をあつめ侍る、巻の表紙にしるへ草と題しそへる  
もいとおこなるわさならし

言の葉のくちせてこしの道のくち

わけいる人のしるへともなれ

文政五年後のむつき 僧祐可しるす

この序文の後には越前国に関する地誌の総論が2丁分あり、その直後から本文が始まる。

本文は敦賀郡から始まる。その掲載項目（名所）を掲載順に列举すると、敦賀郡は道ノ口、有乳山、塩津山、阿岐師ノ里、矢田野、越の中山、敦賀、飼飯海、気比宮、奈呉浦、色ノ浜、手結浦、五幡坂の13項目。南条郡は二ツ屋ノ宿、帰山、今庄駅、杣山、関ノ原、脇本村、武生国生の7項目。丹生郡は丹生山、厨浦、小丹生浦、越知ノ高根、天王村牛頭天王の5項目に加えて飛鳥井宋雅の紀行文「北越紀行」を収録する。今立郡は味真野、花筐桜、不老ノ里、久良谷、高木村、信露貴川、大山、磯部山の8項目。足羽郡は文殊山、浅水ノ橋、冬野寺、玉江、足羽社、桂山、春日社、「越前一乗谷曲水宴詩歌」、一乗谷南陽寺の9項目。大野郡は本大野、平泉寺、白山の3項目。吉田郡は永平寺、藤島、高木村、舟橋の4項目。坂井郡は鳴鹿川、高向、豊原寺、千田村、糸崎浦、三国山、滝谷、東尋坊池、音ノ浜、雄島、塩越ノ松、蓮浦、顔池、吉崎、竹ノ泊、獵地ノ小野、岩坂山の16項目。計8郡65項目である。また、本文末尾（第117丁裏）に「皆文政六癸未初冬再書干蝸牛庵北窓 釈祐可」とある。これによって文政6年(1823)10月に、本書の本文部分が成立したと考えられる。

本書は項目ごとに『万葉集』や勅撰集などの古歌を列举し、その後に『名所方角抄』『八雲御抄』『仙覚抄』などの歌学書や『帰鴈記』『越前名勝誌』『鯖江志』などの地誌を引用しながら解説し、時に自説を述べたものである。その一例として「飼飯ノ海」を掲出する。

○飼飯ノ海 又浦古筭飯又飼飯今気比

万葉集三 羈旅歌八首之中 柿本朝臣人麿  
ケヒノウミノニハヨクアラシカリヨモノミコルアマノ  
飼飯海乃庭好有之荻薦乃乱出所見海人  
ツリフネ  
釣船

同十三 悲別歌  
ケヒノウラニヨスルシワナシクシクニイモカスカタハ  
飼飯乃浦爾依流白浪敷布二妹之容儀者  
オモホシカモ  
所念香毛

方角抄云明神マシマセハ敦賀ライフカ別ノ在所イ

カゝ」〔可云、方角抄ニ引トコロノ歌ハ万葉ノ歌ヲ誤レルナルヘシ〕有人云敦賀港ノ小海ヲ云、曲湾ノ内ニ漁村十八アリト云々、可云、歌枕等ニ越中ノ国トスルハ非ナリ、已ニ日本紀ニ額有角人乗一船泊于越国筭飯浦故号其処曰角鹿也トイヘリ、勅撰名所集ニ敦賀郡トイヘリ、古宮ノ下ニ委ク弁スヘシ、

本書第118丁表には漢文で書かれた跋文があり、その末尾には「皆天保庚子初夏 真斎子題」と記されている。「天保庚子初夏」は天保11年(1840)4月で、「真斎子」は高野真斎である。真斎は福井藩儒で、藩校明道館の教授を勤めた人である。この跋文によって、跋文を含めた本書全体の成立時期は天保11年(1840)4月と推定される。なお、本書後表紙裏面には一葉の紙片が添付されている。その右端には「しるへ草 表紙ヲ除キ百十八枚」とあり、その左側に三段組で「十四オ十一 づノ下不明」、「六三オ八 折ノ下二字欠」などの所見が26件記されている。これらの所見の筆跡は本文の筆跡と同一であるので、この所見は本書の書写者が記したものと推定される。なお、本書の書写者並びに書写年については本書に記載がないので、現在のところは不明である。

『越前名所しるべ草』は本学総合図書館高島文庫にも1点所蔵されている。それは半紙本で、上下2巻1冊本一第47丁表の「今立郡」以降が下巻となる一。全93丁、半丁11行。紺色無地表紙。外題は直書で「しるべ草」、扉には「しるべくさ 上」、序題は「越前名所導者草 上」、上巻の内題はなく、下巻は「越前名所指南草 下」。構成並びに本文は郷土資料室所蔵本と同一である。印記は「高島文庫」。上記以外の両書の主な相違点を記すと、用紙が楮紙であること、郷土資料室所蔵本の後表紙裏面に添付されていた書写者の所見を記した紙片がないこと、本文の一部に胡粉による訂正が認められること、本文の一部に朱筆による加筆があることなどである。なお、本書もその書写者並びに書写年は未詳である。

# 京都書店めぐり報告

大学院工学研究科物理工学専攻教授 菊池彦光  
きくち・ひこみつ

以前読んだ「認識とパタン」<sup>1)</sup>という本のなかで「みにくいアヒルの子の定理」という、分類に関するおもしろい名前の定理が紹介されていた。例えば動物を分類するときには哺乳類とか両生類というように分類する。その際、共通する性質に注目して分類していくのが普通であるが、上記定理によると、どの分類も実は等価であり、アヒルの子と白鳥の子が似ている程度は、ある白鳥の子と他の白鳥の子が似ている程度に等しい事が数学的に示されるそう。この定理が現在情報工学やパタン認識の分野でどのような位置を占めているのかは、専門外なので知らないが、なにやら面白い定理であると思う。さて、別のある本によると<sup>2)</sup> 古代中国では動物は、

1) 皇帝に属するもの、2) 香の匂いを放つもの、3) 飼いなされたもの、4) 乳のみブタ、5) 人魚、6) お話にでてくるもの、7) 放し飼いのイヌ、8) この分類自体に含まれているもの…（以下略）のように分類されていたとか（ウソかホントかは知らない）。この珍妙な（でも愉快的）分類に基づく動物学は考えにくい、上記の定理が正しいとすると、界、門、綱、目、科、属、種というように生物を分類していく「普通の」分類と古代中国の分類の優劣は論理的には判断できないということになる。要するに、ある分類 A と分類 B のどちらを採用するかは論理の問題ではなく有用性や価値判断の問題だということになる。ある分類法が正しいものと思いついて見えないものが、別の分類を持ち込むと思わぬ発見があるかもしれない。

本を分類する場合、図書館で通常採用されている分類法は「日本十進分類法（NDC）」と言われる方法で、まず、0 総記；1 哲学・宗教；2 歴史・地理；

3 社会科学；4 自然科学；5 技術；6 産業；7 芸術；8 言語；9 文学、といった 0 から 9 までの一次区分に類分けし、更に二次、三次と細かく分類していく。この分類に準じた区分けは通常の書店でも踏襲されているようで、自然科学に関する本、文学本、といったように棚が分けられていることが多い。この分類法は大変便利かつ効率的だが、本の分類や区分け法はこれに限るものでもなかろう。実際、こういった従来法ではない方法で本を分けて陳列している本屋さんもあり、その本棚を眺めるだけでも色々と発見がある。

前置きが長くなったが、今回紹介する学生提案型創成教育「本との出会い方・触れ合い方を楽しむ会」は、本に興味を持つ学生の集まりで、工学部及び教育地域科学部の学部生、院生数名により構成されている。読書ワークショップや附属図書館での棚作り、きてみてフェアでのイベント参加などを行ううちに、ちょっと変わった本屋さんの書棚構成を実際に見てみたくなった。残念ながら福井にはそういった本屋が見当たらなかった、9 月と 11 月に京都まで足を伸ばした。その際に同行したので、活動報告ならびに感想を述べたい。学生数は、9 月は 6 名（工；5 名、教育 1 名）、11 月は 2 名（工）。両回に、引率として図書館職員 1 名、更に書店勤務の経験もあり本について広範な知識を有しておられる学外講師 1 名と私が参加した。「恵文社一乗寺店」、「ガケ書房」、「三月書房」といった書店を見学した。恵文社は小さいながらも結構有名な書店で、イギリスの「ガーディアン」紙が「世界の本書ベスト 10」という企画を行った際に第 9 位にランクインしたこともある<sup>3)</sup>。本の並べ方も独特で、同社のサイト<sup>4)</sup>

から一部引用すると、「考えるヒント」、「暮らしの本」、「本を開いてあの頃へ」、「ねこづくし」といった具合。ガケ書房や三月書房等についても、小さい店ながらセレクトされた本や書棚の並べ方が独特で通常の書店とは相当異なる。読書教育という観点から特筆すべき事は、特に恵文社において、学生が夢中になって本を選び読んでいた点であろう。実際、予定した時間を遥かにオーバーして滞留するという予想外の結果となった。後で感想を聞くと、一見関係がなさそうな本が隣りあっているので思わぬ発見があり、ひとつの本棚を見るだけでも十分時間がかかること、他の棚を見た後で戻ってきてもさっきとは違う本が目につき、宝探しのような楽しみ方ができること、などの理由で長時間いても飽きないとの事。ある学生は、科学関係の本と哲学書とが並んでいるのを見て、自然科学（natural science）が哲学（philosophy）から派生してきたという単に知識としてしか知らなかったことが納得できたと語っていた。今回参加した学生は、同じ本でも並べ方ひとつでまったく異なった様相を示しうること、本は繋がりによって意味が生じることを体験的に習得したと思う。本に興味を持たせるような環境にあれば学生は自主的に本を発見・探索し、自らの興味を深化させる事が分かる。ただし、その並び方を楽しむためには一定の知識が必要な場合もある。ふだんあまり外国文学を読まない学生が、フランス文学や英米文学など地域や時代が混在した本が配置された棚を見ても、その意図をつかむのは難しい。今回は、学外講師の方から書棚の配置についての確な説明をしていただき、その結果興味を深めた学生もいた。今後、このような企画を行う際にも、このようなガイド的役割を果たす方が必要であろう。

今回の活動は単に書店に行くだけというものであり、批判的な意見を持たれる方もおられるかもしれない（本を読まずに、単に本屋にいくだけで意味があるのか？）。一方、文部科学省「国民の読書推進に関する協力者会議」報告書<sup>5)</sup>では、読書を巡る様々な論点を取り上げる中で、「単に本を読むだけの読書ではなく、本を選ぶ、勧める、読み合う、本を並

べる、贈り合うといった、いわば、「共読」にまで視野を広げる必要性を指摘している。はなしをここまで広げれば、今回のささやかな取組も「共読」といった観点からは許されるのではないかと思うがいかがであろうか。

ここでは創成教育からの視点で記述したが、附属図書館から今回の活動を見た場合、県外初のブックハンティングという意味もある。それについては簡単ではあるが文教ニュース<sup>6)</sup>にとりあげてもらっている。

今回の活動は、福井大学工学部先端科学技術育成センター創成教育部門学生提案型創成活動からの支援に基づいて行った。感謝いたします。図書館職員の網本幸代さん、ISIS 編集学校講師の小川玲子さんの御協力に感謝いたします。

- 1) 渡辺慧「認識とパタン」岩波新書（黄版 36）（岩波書店）。
- 2) M. フーコー（翻訳、渡辺一民、佐々木明）「言葉と物」（新潮社）。
- 3) <http://www.theguardian.com/books/2008/jan/11/bestukbookshops>
- 4) <http://www.keibunsha-books.com>
- 5) 文部科学省「国民の読書推進に関する協力者会議」報告書。  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/23/09/\\_icsFiles/afieldfile/2011/09/02/1310715\\_1\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/23/09/_icsFiles/afieldfile/2011/09/02/1310715_1_1.pdf)
- 6) 文教ニュース第 2259 号(2013 年 9 月 30 日発行)。



恵文社一乗寺店（京都市左京区）前

私の推薦書

# 「クラシクス」(古典)を読むということ

附属図書館運営委員  
宮崎 光二  
みやざき こうじ

随分長い間、たくさんの本を読んできたように思う。記憶をたどっていけば、凡そ50年を超えて遡ることにもなる。当時、私たちの子供時代には概ねどこの家庭にも、発行元はおぼろげだが何十巻にも及ぶ「日本文学全集」や「世界文学全集」が何故かそろっていて、他にこれといって娯楽のない時代、本を読む時間と機会は逆にとても豊かなものであった。これに加えて我が家には、「吉川英治全集」という（これも十数巻あったらろうか）ものが本棚に並んでいて、「三国志」や「宮本武蔵」といった心躍る読み物の洗礼を受けたことは、その後の私の生き方そのものにも、それなりの影響を持つものであったと思われる。

今、私の、長い読書経験の中から何冊かを選びこれを推薦にすることなのだが、それが大変な難事であることは私がよく知っているし、また自ずと了解されることでもあろう。ともあれ様々に考えた末に、以下の4冊を手元に置くことにした。それは以下の通りである。

- 「神曲」ダンテ・アリギエリ
- 「白鯨」ハーマン・メルヴィル
- 「ファウストゥス博士」トーマス・マン
- 「死霊」埴谷雄高

ダンテの『**神曲**』は私にとっては、尽きせぬイメージの源泉である。制作のモチーフであり、その問いでもある。そして『**白鯨**』は私に小説とはどのようにあるべきかを教えてくれた最初であり、また変わることはない規



神曲



白鯨



死霊



ファウスト博士

範である。稀有な音楽家を描出した『**ファウストゥス博士**』は強固な文体というものがどれほどの力をもつものかを私に教示してくれた。そして最後の『**死霊**』は私が15歳で出くわした将に衝撃的な体験である。その精緻でパラノイア的な、尋常ではない細部の表現から紡ぎだすイメージの豊穡は、なにかしら決定的なものを私に刻み込んだようにも思っている。

さてここでこの4冊を選んだ背景についていくらかお話をしておかねばならない。皆さ

んは「クラシック」という言葉を知っていると思う。「古典」と訳され、今は音楽やバレエの世界でよく使われている言葉だが、本来はラテン語の「クラシス」に由来し、それは戦時における「艦隊」を言うものであった。ローマ時代、国家の危機にあたり複数の軍船、その「艦隊」を提供できる人々を指し、それが転じて私たちの心や精神の危機において、それを支え、励まし、勇気を与えてくれる書物や作品を「クラシクス」(古典)と呼ぶようになった。

ここにあげた4冊の本は、勿論、全てを同じ時期に読んだものではないが、それは、いわば読まれるべき時に読まれたことで、私の心底に確固とした形で置かれたと言うべきであろうし、私の精神の危機において読まれたものと言ってよいものである。クラシクス(古典)というと近世以前の諸作物を想像するのかもしれないが、それは、私という存在の中心に根本的でゆるがない深い示唆を与えてくれたものであるという意味において、いまでもその言葉を響かせているものでもある。それは、表現ということが明確で強固な構造を持つべきであるという事を私に気づかせてくれると同時に、それが極めて美しくなければならぬという事を明らかにしてくれたもの

でもある。私が、得難く、またかなわないまでも、倦むことなくそれを目指し、普段の努力を続けることが曲がりなりにもあるのは、その原動力として、多くをこれによっていると言っていいだろう。勿論、全ての読書経験というものは、どんな些細なものであっても、1つの微かな言葉を私たちの胸奥に残すものであるが、その中心にあり、私を鼓舞し続けるものとして、まことに、私にとって終生のものである。

読書ということは、実は身体のすべての感覚を使って行う全人的な表現行為であることを、若い人には知っておいてほしい。1冊の本を手にとり、それを読み進めることは、単なる表層的な情報を意味することに留まるものではない。それは行間であり、活字であり、色であり、匂いであり、その重さである。そしてそこから得られる真としての体験である。驚きであり、喜びであり、発見である。いくらか長く生きた者として、君たちにもかくの如き1書を得ることがあれば、それは生涯の貴重な糧として君たちの心の中に生き続けることであろうし、又、それを願ってやまないものである。

(芸術・保健体育教育講座 工芸 教授)

# 総合図書館ブックハンティング

～学生の学生による学生のための図書を選んでいきます～

総合図書館では、学生が直接書店に赴き図書を選定するという「ブックハンティング」を行っています。学生の視点から見た図書の選定を行う事により、参加した学生からは自分たちが選んだ図書が図書館に配架され他の学生に利用されるということで、図書館に対する意識が高まり、同時に学びへの関心が深まったという意見が出ています。

◆ 実施日 平成 25 年 7 月 5 日、11 月 22 日

◆ 場 所 市内書店にて 2 回実施

◆ 参加者 学生延べ 16 名

◆ 冊 数 270 冊



今までに実施した「ブックハンティング」のブログを図書館ホームページ上で公開しており、選定した図書本棚及び参加者の紹介レビューをご覧頂けます。

【本棚】



<http://booklog.jp/users/fuklib>

【レビュー】



<http://booklog.jp/users/fuklib/review>

今後も、年に数回程度の「ブックハンティング」の実施を予定しています。詳しくは参加者募集を図書館ホームページ、図書館内の掲示板及びポスター等で行いますので、皆様のご参加をお待ちしています。

## 私の選んだ本

(レビュー抜萃)



絶対にゆるまないネジを発明し、40 年間近く会社を成長させ続けている中小企業の社長さんのお話。企業で働く社会人はもちろん、近い将来企業で働くであろう学生にも是非とも読んでほしい一冊。歴史に名を残すような偉大な人物であろうと、一般人であろうと発明品を生むプロセスは全く同じであり、誰にでもヒットさせる発明の可能性は平等にある!! という事を強い説得力をもって教えてくれています。



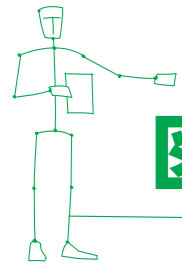
何気なく飲んで一杯のコーヒーですが、ただ飲むだけではもったいない。

コーヒーを学問にしましょう。本書では、工学の目線からコーヒーを科学し、様々な分析機器を駆使してコーヒーの謎に迫ります。最新の分析から明らかになった、数千種類の香り成分や、各種有機酸から由来する独特な風味は、銘柄や産地だけではなく焙煎方法などでも大きく変化します。焙煎、各種抽出方法、挽き方に至るまでじっくり考察されているのでコーヒー好きな理系人はぜひ手にとって戴きたい一冊です。

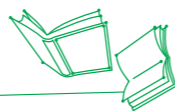


自分は小さいころ恐竜が好きで、よく図鑑などを読んでいたが最近全く読んでいなかったので久々に読んでみたら、まず同じ恐竜の名前でも昔と比べて復元図がかなり異なることに驚かされた。例えば、恐竜の一部は鳥類の祖先であることがほぼ確定的になっているようで、復元図に羽毛がついている恐竜がかなり増えていて解析技術も進んでいるというふうに感じた。

また、この本は最近まで日本で発見された恐竜や中生代の動物の紹介がなされていて、昔は日本が恐竜が全然いない場所と言われていたのがここ数年で国際的な学名がつく種類が増えたことがこの本でわかり、表紙にある通り日本も恐竜がたくさん発掘できる場所の 1 つであると確信できた。



# 図書館の新サービスの紹介

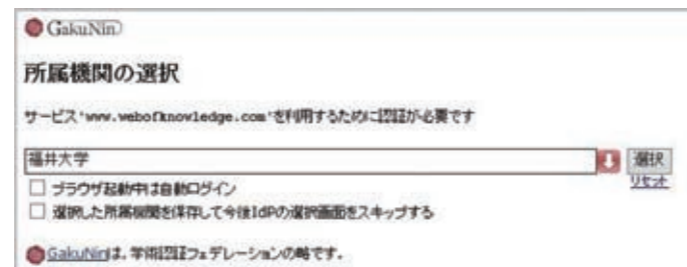


## ■ 学術認証フェデレーション

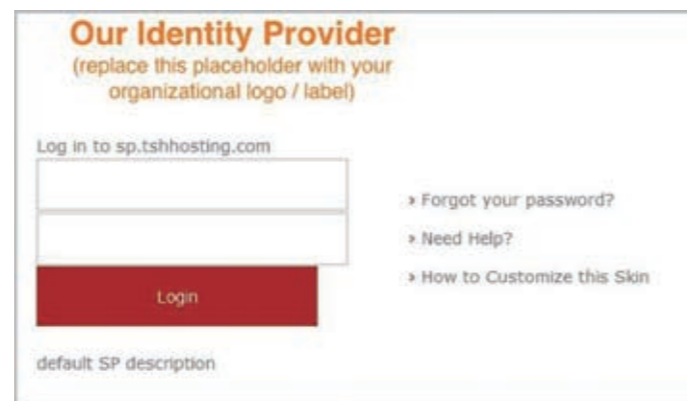
(2013年8月23日～)

これまで学内でしか利用できなかった電子ジャーナルや文献情報データベースなどの電子リソースが、**学外からも利用することができます**。また、学認に対応した電子ジャーナル等間は、シングルサインオンでご利用いただけます。現在、本学が契約している電子リソースで、学認に対応している電子ジャーナル、データベースは以下のとおりです。すべての電子ジャーナルやデータベースが学外から利用できるようになるわけではありませんので、ご了承ください。

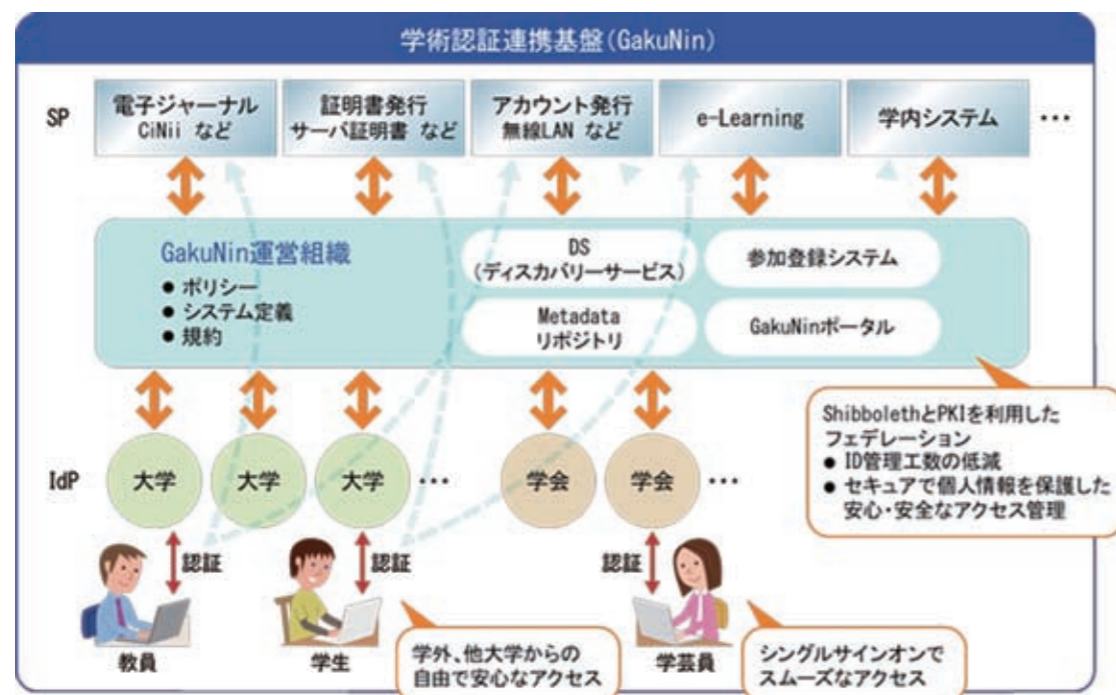
- Elsevier-ScienceDirect
- IEEE All-Society Periodicals Packages
- nature.com
- Springer
- Web of Science・JCR・EndNote Basic
- Discovery Service



▲所属機関選択画面



▲ログイン画面



▲学術認証フェデレーション (GakuNin) の構成図 (公式ホームページより)

## ■ ジャパンナレッジ・プラス NRK (2014年3月1日～)

ジャパンナレッジは、日本を代表する本格的な大型事典をはじめとして、専門辞書、叢書、雑誌などの、多岐にわたるコンテンツが50種以上も搭載されています。それらを自在に検索、閲覧することによって調査、レポート作成、発想支援など、さまざまなシーンにおいて、信頼性の高い知識・情報を活用いただけます。

- 同時アクセス数：1 URL：http://www.jkn21.com/top/corpdisplay

\* ご利用後は必ずログアウトしてください。



## ■ 日経 BP 記事検索サービス (2014年4月1日～)

日経 BP 社が発行する雑誌 (約 40 誌) のバックナンバー記事を、オンライン上で、テキスト形式 (本文のみ) または PDF 形式 (記事全体・雑誌イメージそのまま) でダウンロードできるサービスです。読みたい情報をオンラインで、いつでも簡単に検索・閲覧することができます。

- 同時アクセス数は無制限ですが、契約金額で年間の全文ダウンロード数 (PDF を開いた時点でカウントされます。) が決められています。
- 記事の収録タイミングは、すべての雑誌について、週刊・月刊にかかわらず、一律発行日の一週間後 URL：http://bizboard.nikkeibp.co.jp/daigaku/



## ■ 最新看護索引 web (2013年4月1日～)

看護系雑誌文献情報データベースが増えました！

◎以前よりご要望の多かった「日本看護学会論文集 (電子版)」が全文閲覧できます。

(42 回 (2012 年) から電子版、それ以前は冊子体で図書館所蔵)

◎国内唯一の看護分野に限定した、雑誌文献情報 DB です。(1987 年～約 800 誌)

◎初心者にも使いやすい構成となっております。どうぞご活用下さい。



福井大学附属図書館 → 電子ジャーナル… → 日本語文献 → 最新看護 web

URL：https://www.libraryplus.jp/bcs/li/

※医中誌 web やメディカルオンラインともリンクされています。

- 松岡キャンパスのみ
- 同時アクセス数：4

\* ご利用後は必ずログアウトしてください。

## ■ 主な行事等

### 2013.06.10 (月)

医学図書館運営小委員会

- 平成 25 年度医学図書館予算配分 (案) について
- 今後の資料整備方針
- ～電子ジャーナル・データベースについて～

### 2013.07.04 (木)

附属図書館運営委員会

- 平成 25 年度附属図書館予算配分 (案) について
- 今後の資料整備方針
- ～電子ジャーナル・データベースについて～

### 2013.07.29 (月)

医学図書館運営小委員会

- 平成 26 年度の資料整備方針 (案) について
- サブコアジャーナルの見直しについて

### 2013.07.30 (火)

総合図書館運営 WG

- 平成 25 年度附属図書館予算配分 (案) について
- 今後の資料整備方針
- ～電子ジャーナル・データベースについて～

### 2013.09.06 (金)

日本医学図書館協会北信越地区研修会

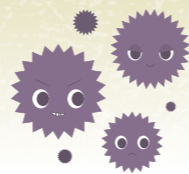
- 診療ガイドラインの最新動向と作成支援

### 2013.12.04 (水)～06 (金)

目録システム地域講習会 (雑誌コース)



# 医学図書館 歳時記



こんな資料が入りました

## ▼災害医学・災害看護関連図書 54 冊



災害医学・災害看護授業担当の先生方の選書によるものです。被災地で医療活動に従事される医師・看護師だけでなく、病院の災害対策担当者、被災者、災害ボランティア、帰宅困難者向けの図書もあります。2014 冬放映ドラマ「DMAT」の原作マンガも！



## ◀ DVD

医学部後援会から「DVD 臨床診断推入門 1-6 巻」が寄贈されました。医師が臨床現場での確な診断をするための臨床診断推論について分かりやすく説明し、具体的な臨床診断推論の進め方を日常の診療でよくみられる症例で紹介しています。

## ▼「ファブリカ」復刻版



「ファブリカ (The Fabric of the Human Body)」は、現代人体解剖学の創始者といわれるアンドレアス・ヴェサリウス (Andreas Vesalius) による実証的な人体解剖書で、医学史に大きな功績を残しただけでなく、芸術的にも優れていると言われています。この度、ヴェサリウス生誕 500 年を記念して 2013 年に出版された「ファブリカ」の復刻版を、人体解剖学・神経科学の飯野教授からの推薦で医学図書館に備え付けました。

こんなことしました

## ▼教員著作物の紹介



本学教員の著作図書だけでなく、雑誌論文も先生方の提供により被掲載雑誌や抜き刷りを展示しました。リアルタイムな研究業績を、学生の皆さんは手にとって興味深げに見ていました。



## ◀医療系記事コーナー

医学科 6 年生から、「医師国試には時事問題も出るので最近の医療トピックスを掲示しては？」という提案にお応えして医療系の記事や新聞類を集めてコーナーにしました。

こんなことしました

## ▼UpToDate・EBMR 講習会



シンガポールやシドニーから専任トレーナーをお呼びして上記の DB 講習会を開催しました。日頃から英語の重要性を感じている医学生にとって、更にモチベーションが上がったようでした。

## ▼書き初め



年の初めに、ラウンジに於いて書き初めをしました。自由楽しく書いていただけたようでした。皆さんの願いが叶うよう、しばらく飾った後、左義長祭りで焚き上げました。

## 国試応援メッセージボード▶

国試が近づき、受験勉強も最後の山場となった時期に、後輩や先生、職員からの応援メッセージを寄せ書きしてもらい、出発式に持って行ってもらいました。皆さま、ご協力ありがとうございました。

## ▼カルタ展



総合図書館所蔵のカルタを展示しました。和の心に通じる「いろあわせ」を始め、数十種類あります。併せて「筋肉かるた」やマンガ「ちはやふる」も揃え、国試を控え、緊張した心をリラックスさせてもらえたようです。

## ▼学生用 Wi-Fi

今まで、松岡キャンパス限定のデータベースや電子ジャーナルは、学生用 Wi-Fi から見られませんでした。この度、医学部学生からの強い要望が実現し、利用可能となりました。



お参りしました

## ▼金津中学校 3 年生



ハロウィーンに合わせた館内マップで探検してもらいました。

## ▼カルガモ親子



今年も図書館横の池にかわいらしい姿を見せてくれました。

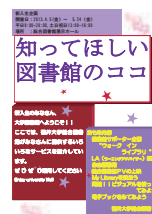
# 附属図書館展示企画 2013

附属図書館では所蔵資料の公開と教育・研究活動の紹介を目的にさまざまな企画展示を行っています

平成 25 年 4 月 5 日(金)～5 月 24 日(金)

## 新入生のための展示 “知ってほしい図書館のココ”

図書館を利用するにあたって、自由図書館の紹介やプロモーションビデオの上映、スタンプラリーなどの企画に加え今回はパソコンを使って MyLibrary や聞蔵Ⅱビジュアルなどのデータベースを体験してもらうコーナーを設けるなど図書館のサービスを中心に紹介しました。恒例“コトノハメッセージ”で新入生の夢や希望を書いたメッセージカードを展示しました。



平成 25 年 5 月 31 日(金)～6 月 12 日(水)

## グリフィスと福井 増補改訂版出版記念展

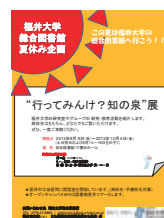
この展示では増補改訂版に使われた貴重な写真や文献等の展示、また昭和 2 年にグリフィスが来福した際にグリフィスから贈られた「青い目の人形」を展示しました。併せて「異人館の鍵」、額「異人館」吉田文山画、「異人館の写真」も展示しました。



平成 25 年 8 月 9 日(金)～10 月 4 日(金)

## 「行ってみんけ? 知の泉」展

福井大学を知ってもらおうという目的で各研究室やグループの教員・学生の皆さんに協力いただき、それぞれの研究・教育活動の内容を紹介しました。オープンキャンパスの日にはたくさん的高校生が図書館を訪れ、この展示も興味深く見ていただきました。同時に館内ツアーも開催しました。



平成 25 年 10 月 20 日(日)～10 月 31 日(木)

## 「ピーターラビットの世界」写真展

「ピーターラビットの世界」の舞台であり、ビアトリクス・ポターが愛したイギリス湖水地方の写真を展示するとともにピーターラビット関係の図書の展示を行いました。海外に出かける度に児童文学の舞台となった現地を訪れ数多くの写真を撮ってこられた池田正孝(中央大学名誉教授)の写真をお借りしたものでした。



平成 25 年 11 月 17 日(日)

## グリフィスと福井 増補改訂版出版記念講演会

「グリフィスと福井 増補改訂版」の著者である山下英一氏と横浜創英大学の蔵原三雪教授による講演会を県立図書館多目的ホールにて行いました。併せて、「グリフィス研究家 山下英一展」を同会場において開催しました。



平成 25 年 11 月 20 日(水)～12 月 11 日(水)

## 「図書館員・書店員がすすめる 20 代に読んでおきたい本」展

福井県立図書館で企画されたものを、本学の学生にも読書のヒントのひとつとして見てもらいたいと思い、パネル展示を行いました。この企画には総合図書館のスタッフもおすすめ本とコメントを書いて参加しました。



平成 26 年 1 月 27 日(月)～2 月中旬

## みんなでつくる写真展

福井大学の写真サークルふおとん!の企画による写真展を行いました。カメラ好き、写真好きの作品が展示ホールの壁をいっぱい飾りました。

